

教員への道を模索した指導と取り組み

齋藤 元

1 はじめに

神奈川大学で非常勤講師と学習アドバイザーをさせていただいてから2年半が経過した。今年度前期では、非常勤講師として「教職論」「特別活動論」「ボランティア演習Ⅰ」の授業を担当し約90人の学生の指導をしてきた。また、学習アドバイザーとしては、中学生への個別学習支援や小・中学校でのアシスタントティーチャー等のボランティア活動をしている学生のサポートや相談、指導を行い約30～40名の学生と接してきた。両方の立場で接してきた学生の多くは、教員免許状を取得して将来は教員をめざしている。

昨年度までに指導、支援してきた学生の中の何名かは正規教員や臨任教員・非常勤講師として採用され、学校現場で元気に活躍している。それらの学生が教員として活躍することができるようになるまでには、多くの大学の先生方の指導や支援があったことは言うまでもないが、アシスタントティーチャーなどのボランティア活動を通じて指導や支援をいただいた中学校の先生方や大学からは見えにくい多くの方たちのお力添えもあった。卒業生たちの現在の感想や思い、様々な関わりの中で指導や支援、協力をいただいた方たちの考えや思い、そして私の現役教員時代の教職に関する思いや考えなどを含めて、学生が教員として活躍するまでの指導や経過についてふり返ってみたい。

2 現役時代に考えていた資質とは

大学卒業後、1年を経て公立中学校教員として採用された。初任校では、自分のクラスのことだけを考えて無我夢中で仕事をし、学級担任として生徒と一緒に活動することが中心の6年間だった。教員が社会から何を求められているのか、教員にとって必要な資質とは何かというようなことは考えたことはなかった。

6年が経ち2校目の学校に異動となり、現在ではありえない17年間という長い期間勤務することになった。着任してから2～3年の間に学区内に市営の大団地が建築され、生徒数が1300人を超える過大規模校となった。毎年数名の新任や臨任の教員が着任してきて、いつの間にか学年の行事の計画を立てたり新任として入ってくる後輩の教員の指導や世話を任されるようになった。忙しさは増していき多少は負担に感じることもあったが、それ以上にやりがいや喜びを感じることも多くなった。自分や学級のことだけではなく学年にも目を向けるようになり、他の教員と協力して所属学年を生徒にとっても教員にとっても安心して過ごすことができ、互いに成長することができる場になっていきたいと思うようになった。

30代中半で学年副主任になった。その頃から、教師という仕事は一人でやっていくものではなく、他の教師と協力や連携をしていくことが大切だと思うようになった。しかし、数年後には1学年が14クラスで所属教員数も20人

以上という大集団となり、毎年多くの教員が異動等で入れ替わり、教員はバラバラで共通理解も連携・協力もままならない状況となっていた。生徒は荒れていき校内暴力や対教師暴力は日常茶飯事となってしまった。教員の誰もが疲れ果て、教員としてのプライドや自信も失い、毎日学校に行くことが憂鬱にさえなっていた。今振り返っても、長い教員生活で最も苦しい無力感を感じる3年間になってしまった。

その学年が卒業したと同時に40代となり始めて学年主任となった。8クラスで所属教員が14名でのスタートであった。教員の年齢構成は大半が20代から30代前半という若い集団だった。前の学年の轍を踏まないように、教員同士の共通理解と協力・連携がスムーズに進められるように腐心した。学年目標は私の願いと期待を込めて「生徒一人ひとりが安心して楽しく過ごすことができ、互いに高め合い成長できる学年」とさせてもらった。目標通りの学年を築いていくためには所属している教員が常にコミュニケーションを図りながら、共通理解と協力・連携をしていくことが何よりも大切だと考えた。学年経営は苦勞することも多かったが、とてもやりがいがあり楽しかった。若く経験年数の少ない担任をどのように育てていくかを副主任やリーダー格の担任と常に話し合い積極的にサポートしていくことにした。同時にベテラン3人のモチベーションを高め豊かな経験を学年の中で積極的に生かしてもらうように働きかけた。仕事が終えた後に食事や飲みに行ったり、学年の職員旅行を毎年行うようにした。長い教員生活の中で最も充実して意欲に満ちた3年間であり学んだことは多い。特に教師間のコミュニケーションを積極的に図り情報共有をしながら相互の理解を深めていくことの大切さを痛感した。学年の教員間の意思疎通がスムーズとなり共通理解ができていくと教員同士の人間関係が良くなっていく。自然に職員室の居心地もよくなり気持ちに余裕が生まれ、モチベーションも高まり生徒への接し方も穏やかで温かい感じ

になる。たとえ、困難な問題や課題が生じたとしても全員で協力しながら解決することができるといことも実感することができた。最近の学校現場で重要なキーワードとなっている「教員のチーム力」の必要性和効果を身をもって知った3年間であり、教育に対する意欲や情熱だけではなく、協調性、謙虚さ、コミュニケーション能力などが教員には極めて大切であることに気付かされた。

3 市教委人事担当・校長として

校長になる前に、市教育委員会で教職員課の担当課長を勤めた。主な職務内容は、中学校教員の人事と服務であった。採用及び異動から昇任までの原案作成を一人で行うかなりハードで重圧を感じる職務であった。何よりも大切にしていたことは、困難な状況にある学校を人の入れ替えや加配などの人事によって活力を与えより良い学校へと活性化させ、生徒にも教職員にとっても安心して生活できる学校にしていこうであった。人事異動の時期になると多くの校長が頻繁に相談に來た。どこの学校にも多かれ少なかれ人事上の問題や課題はある。生徒指導や学級経営がうまくいっていない学校では人事異動でのデコ入れを求めてくる。問題となる教員の多くは、指導力がないだけではなく協調性がなく人の話を聞けないような人が多い。指導力がないだけなら周りの教員が協力することができる。しかし、協調性がなく人の注意やアドバイスを受け入れられない教員への協力や支援は難しい。そのような教員を異動させたいという相談が多かった。その代わりに当然のことだが指導力があり協調性もある教員を求めてきた。その結果、教員を採用する時には、教育への意欲や熱意だけではなく、特に協調性や素直さ謙虚さなどについて注意深く見極めて評価するように心がけた。その後、2校で校長として学校経営に携わったが、教員についての悩みの多くは、指導力不足や協調性に欠けている教員の扱

いをどのようにしていくかということだった。

教員として必要な資質や技能についての考えは、立場や経験によって多少の違いがあったように思える。しかし、37年間の教員生活を振り返ってみて、特に必要なのは「社会人としての常識、実践的指導力、協調性」だと思った。それらは、生徒や保護者から信頼される教員にも必須の条件ではないだろうか。そのような思いを忘れずに教員をめざす学生たちの指導に当たっていきたいと思っている。

4 学生を指導して思うこと

非常勤講師として2年半、教職課程の授業を受講している学生を見てきて思ったことがいくつかある。例えば、今年度前期の「教職論」を受講した41名の8割以上の学生が教員になることを考えている（「迷っている」と答えた3割を含む）。今までに多くの教員や自分自身でも思ってきた「教員に求められている資質」が備わっているかという観点から見ると、心配になることが何点かある。最初に思ったことは、遅刻や私語が目立つことである。資質というより社会的マナーであるが、子どもを指導する立場になるのであれば、最低限度のマナーは身に付けておくべきだと思う。私語についてはその場で極力注意をしている。注意をすれば、ほとんどの学生はすぐにやめる。遅刻については、教員のマナーとして特別な場合を除いて許されないことであり、授業開始のチャイムが鳴った時には少なくとも教室に入っているように言っている。また、途中で黙って出ていく学生がいることに戸惑ったが、できる限り理由を聞くようにしている。いずれのケースも中学校教員時代に中学生が同様な行為をする場面を見たことはなく、小中学校では指導や注意をすべき行為であり黙って見過ごすべきではないと思っている。

授業では毎回課題を与えてグループワークを行うとともに簡単なレポートを書いて提出さ

せ、必ずコメントを書いて返している。グループワークを見ていると、話し合いに参加できない学生や話し合いがスムーズにできないグループがある。教員にとって誰にでも声を掛け、コミュニケーションを取ることができる能力は必要である。机間指導をしながら、話し合いのヒントを与えて参加を促すようにしているが、教員として務まるのか心配になる。レポートを見て気になることは、的確な文章が書けなかったり、誤字が多く乱雑な文字で書く学生が多いことである。教員は、子どもや保護者に向けた文章を書く機会が多い。最近では、パソコンを利用する場合が多いので直筆で書くことは少なくなったが、きちんとした文章と文字で書くことができることは絶対に必要である。学生には毎回、読みやすい文字と誰が読んでも理解できる文章で書き、提出する前には必ず読み直すように言っている。改善していく学生もいるが、なかなか改善できない学生が比較的多いように思える。他の非常勤講師に聞いても同じような状況だと言う。学校ボランティアで学生がお世話になっている学校の校長や教頭が「学生を見て不足していることは何か、大学でどのような指導をしてほしいか」というアンケートの問いに対して、「社会人としての一般常識や経験が不足している」「社会人として必要な一般常識やマナーを指導してほしい」と答えている。また、「この段階では、教員としての知識、技能、力量は求めませんが、学校という特殊な文化を紹介しておいていただけるとありがたいです」と答えた校長もいた。大学で、アシスタントティーチャーや学習支援をしている学生を見ても、社会的な常識やマナーが身につけていないと思うことがよくある。小中学校を訪れる際の連絡や挨拶の仕方、服装、言葉づかいなど細かなことだが指導する必要があると思っている。

5 学校と教員を理解できる経験を

授業で教員の職務や学校の組織、機能等について質問したりレポートを書かせてみると、想像していた以上に理解できていないことがわかる。臨任をしている卒業生が、アンケートの「現在困っていることは何か」という問いに対して「教科指導のほかに校務分掌や学級経営について学んでこなかったことがあり、どうすればよいかわからないことがよくあります」と答えている。「校務分掌」は、教員を経験した者であれば耳慣れていて誰でもが分る言葉だが、児童生徒という立場でしか学校を見ていないことを考えれば当たり前なのかもしれない。ボランティア活動で学校に行っている学生が、「職員打ち合わせ」と「職員会議」を混同していることが多いが、同様な事例だと思う。そのような状況を考えると、学校や教員に求められている「学校のチーム力」「実践的指導力」などの言葉についての理解が難しいということが想像できる。以前、1年以上アシスタントティーチャーを経験した学生が「生徒指導では、先生方の情報共有や連携、協力がいかに大切かがわかってきました。それがうまく機能し実践されている学年は生徒が落ち着いていて、問題の多い学年はうまくいっていないということもわかりました」と言ったことがあった。非常勤講師と学習アドバイザーという両方の立場で、多くの学生が学校ボランティアを経験して、学校や教員の現状や現実について理解し、必要な知識や技能を高めていながら成長する姿を見てきた。そのような経験は、教員になってからだけではなく、教員採用試験の面接、模擬授業、場面指導、論文試験等でも少なからず役立っている。人事採用担当という立場でも強く感じたことであり、学校現場でのボランティア活動が、教員をめざしている学生たちにいかに有意義な活動であるかを伝えていきたいと思っている。

6 成長へ繋がるボランティア活動

アシスタントティーチャーを希望した学生は、通常は近隣の3～4校の中学校に紹介している。しかし、横浜市以外の県内出身者で自宅から通学している学生には、出身校又は出身地域の学校に相談することを進める場合がある。特に、横浜市以外の教員採用試験を受験する予定の学生にはそのような対応をしている。教員採用試験を受ける際に、受験する自治体にある学校で活動している方がプラスになる情報やアドバイスを得られる可能性があるなどの理由からだ。それは、校長や採用担当の経験を通して思ったことであり、教員になることを真剣に考えている学生には特に伝えておくべきだと思っている。そのような理由から、私が教員としてお世話になったK市の中学校に紹介している学生が毎年何名かおり、今年度も6名の学生及び卒業生が活動している。

K市では、アシスタントティーチャーとして活動をする人を「教育サポーター」と呼んでいる。教育委員会の事業として10年以上前から始まった。実際の運営は、退職校長有志が立ち上げたNPO法人¹⁾に委託され、募集・登録・配置・研修などを行っている。希望者は、登録し簡単な面接を受けてから学校に派遣される。サポーターとして活動しているのは教員をめざしている大学生が大半だが、元教員や近隣に住んでいる市民が行っている場合もある。傷害保険に加入し少額ではあるが謝金が支払われることになっていて、一般的な学校におけるボランティア活動とは異なる。学校は、常に人手が足りない状況なので、非常勤講師が配置されないような場合の不足を補う戦力として期待されている場合が多い。取り出しや寄り添い指導をするなど生徒の個別的な指導や支援を任されることが多いが、TTなどで教員の補助的な役割をすることもあり、実践的指導力を理解し身に付けるための絶好の機会となっている。また、昼食指導や行事の引率補助、体育祭や文化祭など

の手伝いなどに呼ばれることも多く、行事終了後の職員反省会や慰労会などに誘われることも珍しくはない。ほとんどの学校で職員室に座席を設けており（多くは非常勤講師等との兼用）、朝の職員打ち合わせに参加している場合も多い。そのような経験を通して、職員室や教室以外の場でも教員から指導を受けたりコミュニケーションを図る機会ができ、教員の生の声や本音を聞くこともできる。今学校に求められている「教員のチーム力」の意味と大切さについて学ぶこともできる。また、NPO法人が主催する「サポーター研修会」が年に数回行われ、教育委員会の指導主事や現職校長、退職校長などが講師となっており、学校や教職について実践的知識や技能などについて学ぶこともできる。1年間経験して中学校の卒業式にも参加した学生は「教員の仕事、苦勞と喜び、やりがい、教員から見た学校などが少しわかってきた。また、先生方の学校では見られない姿や聞けない意見などを知ることができ、本音も聞くことができて本当に勉強になり楽しかった」と言っている。K市の教員採用試験では、現役の学生ではサポーター経験者の合格率が高く、不合格の場合でも臨任・非常勤教員として採用される場合が多い。学校現場が即戦力となる新任教員を求めている現実を考えれば理由は理解できるように思う。

教育サポーター希望する学生が来ると面談をしてから引き受けてくれる学校を探す。条件は、自宅と大学から通える場所であることや学ぶことができる学校であることを最優先にしている。学校は、管理職の考え方で状況や環境は大きく変わる場合が多く、とりわけ校長の影響は大きい。教育サポーターについてどのように考えて採用しているかによって、学生の経験と学びの質はかなり違ってくる。そこで、私の知っている範囲で安心して学生の指導やサポートを任せることができる学校（管理職）をお願いをしている。昨年度と今年度に5名の学生を引き受け指導してくれた校長は、アンケートの中の

「学生に不足していることや大学に指導してほしいこととは」という問いに対して次のように書いてくれた。「学生に特に不足していると思うことはありません。大学生でありながら、学校現場でボランティアをしようと思っていること自体、素晴らしいことだと感心しています。サポーターをしながら、人間として、教師として成長してもらえればよいと考えています。大学で指導してほしいと思うことはありません。気が付いたところは、その都度現場の担当教員が指導すればよいと思っています」。「週に一回ですが、学校現場を経験することは大変意義のあることだと思います。中学校現場の現実をマイナス面も含め、しっかり見て帰ってほしいと思っています。また、K市が教員としていかに働きやすいか、まとまっているか、採用試験についてなどもお話しするようにしています」。この校長は、適切な指導を優しく丁寧にしてくれると学生たちは言っている。2校で職場を共にしたことがある最も信頼している後輩の一人であり、読んでみて改めて安心して学生を任せられると確信した。サポーターとしてだけではなく、スキー教室の引率補助でも4人の学生が参加させてもらった。今までにお世話になった学生たちは、校長だけではなく、教頭を含めて多くの先生方から温かな指導や声掛けをしていただき、大学で顔を会わせるたびに楽しそうに活動の様子を話してくれている。

また、ある教頭からは、アンケートの同じ質問に対して「サポーターとして、優秀な学生を派遣していただいて感謝しています。学校現場で働く目的や生きがいを感じながら、誠心誠意頑張る姿が見られます。宿泊学習（自然教室・スキー教室）での指導員としても、協力をしていただいています。教師をめざす資質として、自ら考え行動できる学生であり、子どものことを考え理解し支援できるものでした」。「中学校からのニーズが時々変わるので大変だと思います。学校現場で働いているので、先生方とのコミュニケーションや生徒との関わりから、教師

をめざすことへの自身ややる気の向上へとつながることができればと思います。お世話になっている学生の皆さんが、採用試験に合格し教壇に立つことを願っています」という回答をいただいた。学生たちは、「いつでも気軽に声を掛けてくれる話しやすい教頭先生です」と言っている。彼も3年間同じ職場で働いたことがある後輩で教育委員会での勤務経験があり、採用試験前にアドバイスをしてくれるなど丁寧な指導をしてくれており、学生たちから信頼されている。

学生が教育サポーターとして活動する前には、行き帰りの挨拶、欠席や遅刻する場合の連絡方法、相談や報告の相手や方法、服装などについて指導をしている。活動の様子を直接見ることはないが、お世話になっている中学校の管理職や教員とは私的な会合等で会うこともあり、活動の様子などについて聞くことができる。また、必要があれば電話で聞くこともできるので、学校に行ってから指導はその学校の先生方に全面的に任せるべきだと考えている。

7 教員の道へ繋げる取り組み

前述したように、今後の授業と学生への指導や支援の参考にしたいと考え、学生がサポーターでお世話になっているK市の中学校管理職の先生方にアンケートをお願いした。同時に教育サポーターを経験し、現在はK市内の中学校で教員として活躍している卒業生にもアンケートへの協力をお願いし、次のような質問に答えてもらった。

- ①教員としてやりがいや喜びを感じるのはどのような時か。
- ②仕事で困ったり悩んでいることは何か。
- ③大学時代の授業や活動で学んだことで教員として仕事をする上で役に立っていることは何か。

④大学時代にもっと学ばべきだったと思うことは何か。

⑤教育サポーター(含むボランティア)の経験で役に立っていると思うことは何か。

臨任として特別支援学級担任をしている卒業生は次のように答えてくれた。

①生徒の笑顔を見る瞬間です。その笑顔の背景には生徒が悩み苦しんでいたり、努力の過程があります。できた!頑張ったという笑顔が弾ける瞬間は、一緒に喜びながらも「先生って楽しい!」と思えます。

②教科指導の他に、校務分掌や学級経営など学んでこなかったことがあり、どうすればよいかわからないことがよくあります。他の先生も忙しい中教えてくださっているので申し訳ないです。

③教育サポーターに行き行って学んだことは非常に役立っています。授業やサポーターの経験を通して出会った友人とは、今でも悩みを共有したり相談できるのでとても良い出会いでした。

④校務分掌、学級経営、部活動運営と教科指導について、実技分野や保健分野について、中学校で教える内容を詳しく掘り下げて学習したかったです。

⑤学校全体の一日の流れや各教科の先生の指導方法を知ることができたこと。生徒との接し方や特別支援学級での生徒への配慮方法など。(自分が特別支援学級のない小中学校で生活してきたので)

2校の中学校で教育サポーターを経験して正規採用され、社会科教員として活躍している卒業生は次のように答えてくれた。

①社会の授業が楽しい、わかりやすいと言ってくれる生徒(テストのひと言欄にヤンチャな女子が「先生のおかげで社会が好きになった」

と書いてくれた)がいたとき。子供たちと話をしているとき。

- ②教材研究など自分のことに時間がかかり、もっと学年の先生の仕事を手伝いたいと思う。
社会が得意な子と、そうでない子の差に対応することが難しい。
- ③教育サポーター活動と先生が仲間を集めたカンファレンスでふり返りをしてくださり、いろいろな人の考えを聞いたこと。
教科教育法の授業でみんなの前で授業の練習をし、いろんな意見を言ってもらったこと。
- ④生徒指導と評価について。
- ⑤学校現場の一日が見られたこと。何より、子ども達との関わりの中で考えて行動したり、先生方の動きを見て学んだことが働き始める前にできたことで、今の自分の行動に生きていくと思う。K市の教員の方々はあたたかいので、教員間のつながりを大切にしてくれています。サポーターをやっていたことによりそのつながりが増え、いろいろな学校の先生が話しかけてくださいます。また、働き始める前にプリントや授業のスライド、生徒対応についての資料をくださった先生もいました。

二人とも、生徒との触れ合いの中で教員としての喜びややりがいを感じていることに、教員としての資質と適正を感じることができる。授業や生徒指導の難しさ、校務分掌や学年の仕事などが十分把握できていないことなどで戸惑いはあるようだが、他の教員とコミュニケーションを図りながら、新任として必死に仕事に打ち込んでいる様子が伝わってきた。周りの教員から暖かく支援されており、やがて一人前の教員として活躍する日が間違いなく来るように思えた。アンケートに答えてくれた他の卒業生の回答も含めて、彼らの感想や思いを今後の授業や学生への指導や支援の参考にさせてもらいたいと思っている。

8 現場へ送り出す取り組み

教員をめざしている学生の中には、資質や適性を十分に持ち合わせていると思われる者も少なくない。しかし、現役で採用試験に合格する確率は低い。不合格となり教員への道をあきらめてしまった学生もいる。私が知る限りでは、現役の合格者数よりも臨任や非常勤を経験してから採用された人数の方が多い。できれば現役で合格するように支援していきたいが、不合格となった学生への支援もしていきたいと思っている。K市の教育サポーターをしている学生については、お世話になっている学校の校長や教頭にも指導や支援をお願いしている。中には論文や面接の練習をしてくれたり、丁寧なアドバイスをいただくこともあった。これからも学生の相談には積極的に応じていきたいと思っているが、非常勤講師の立場でできることは限られている。K市教育委員会の担当者から臨任や非常勤候補者の紹介の依頼が個人的に来ることがあり、専任の先生や職員の方をお願いして候補者を紹介していただき、何回かは依頼に応えることができた。また、同様に理解と協力をいただき教育委員会が大学に来て臨任・非常勤候補者の登録申込みをできるようにしていただいた。その結果、K市への受験者と臨任非常勤候補者登録者が増え、今年度は、臨任と非常勤を含めて10名の学生と卒業生が教員として採用されて活躍している。新たに大学推薦枠をいただいたとも聞いている。大学・学校・教育委員会との関係が、わずかではあるが前進したように思える。しかし、あくまでも個人的な関係であり、組織としての協力や連携が進んだわけではない。今後、教員をめざす学生が一人でも多く目標を実現し、教壇に立ち活躍できるようにしていくために協力や連携が前進し組織的な関係が築かれていくように期待している。

【注】

- 1) 認定NPO法人 教育活動総合サポートセンター (2004年4月1日設立)

元校長や元教育委員会職員などを中心に100名以上の会員(役員を含む)が在籍し、主に教育サポーター事業・初任者巡回指導・学習支援・教育相談・研修及び後援会などの活動をしている。